

「階段付き地下式坑」について

小山裕之

はじめに

平成4年10月から平成6年3月まで、筆者は七沢神出遺跡の調査に参加し、中世に比定される2基の階段付き地下施設を検出するに至った。本遺跡の報告書は6年3月に刊行し、その中でこれら2基の遺構を地下式坑として扱ったが、調査団長の戸田哲也先生から従来よりの地下式坑の形態概念である「地平面下に堅壙を掘り下げてこれを入口部とし、その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」とは形態的に異なる点について指摘された。その後、報告書・研究論文等をあたるにつれ堅坑による入口部ではなく、七沢神出例に類似する斜行階段付きの地下式坑が数例存在することを確認した。

従来の地下式坑概念に基づくならば、はたしてこれらを地下式坑に含みこむべきかどうかという点で筆者も疑問を持つ一方、地下式坑概念はまだ形態、機能とも解明されるには至っておらず、資料も少ない時期に九州南部の地下式横穴の形態を流用して概念化した部分が多々あるため、現状における発見資料の増加・研究の進展に伴い判明してきた遺構の形態の多様性、時間軸、平面分布などの実情にそぐわなくなってきた点もあるのではないかとも考えた。筆者はそこで地下式坑の概念を現状に照らし合わせて、「地表面から地下に向かって何らかの入口施設を設け、その底面から横方向に地下室を築いた中世期の遺構」とやや幅広く解釈して七沢神出遺跡検出の遺構も地下式坑の範疇に含まれるものとし、改めて、形態論を中心に新資料としての七沢神出遺跡の階段付き地下式坑を分析のうえ、他の形態との比較検討を試みることとする。

I 研究略史

地下式坑の研究史はすでに中田英氏（1977）、半田堅三氏（1979）の論考の中で詳細に述べられており、重複を避けるためにここでは略史として記述するに留めたい。

1915～1934（戦前）

地下式坑研究は梅原末治氏が『考古学雑誌』（1915）に福井県敦賀市発見の25基の遺構を発表したことに端を発している。梅原氏はこれらの遺構に「横穴古墳」の名称を与え、その後の九州での弘津忠文氏（1924）、吉村鐵臣氏（1929）らの調査発表も同様に横穴墓の一形態としてとらえているが、中山平次郎氏は「所謂横穴は横式壙穴を代表し、又大分のものは堅式壙穴を代表し、恰も其中間形若しくは混合形として彼の地下式土壙が来るといふや

うに考察される。」として地下式古墳との形態的区別を行っている。また、東日本でも御茶の水高等師範学校跡地において発見された地下式坑を契機に上田三平氏の墳墓説（1934）、服部清五郎氏の貯蔵庫・地下式倉庫説（1934）、大場磐雄氏の龜室説、隠匿壙説（1934）など地下式坑の性格を巡ってさまざまな仮説が提唱されたが、その中でも龜室説、隠匿説が有力視された時期である。また、調査自体は偶発的な発見によるものが殆どであり、その構築時期も古墳時代末期から近世初頭と幅広い時期差で論議されていた。

1950年代

1950年代には注目すべき発見が相次いでなされている。1953年には井ノ頭公園で中世期に比定される人骨を伴う地下式坑の発見、金井塚良一氏による埼玉県東松山市高坂（1955）での地下式坑の報告、また1959年には東京都府中市高倉遺跡で地下式坑が平安期の住居址を切り込む形で検出され、地下式坑の時期的上限を把握した最初の例となり、これにより地下式坑の構築時期が概ね中世以降という認識を得ることが出来た。また、東京都武藏野市で検出された地下式坑（1959年発見）は紀年銘入りの板碑5枚を出土し、吉田格氏はその報告（1963）で墳墓説をとっている。

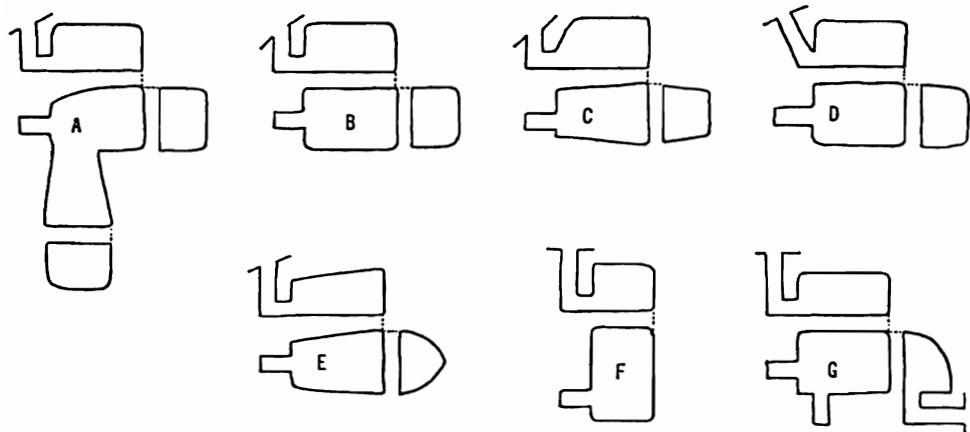
1960年代

1960年代からは日本の高度経済成長に伴い、各地で開発事業が進行する中で、相次ぐ発見がなされている。中でも東京都青梅市今井城址（1967）、千葉県松戸市大谷口城址（1962）から地下式坑が検出されたことは中世城郭址との係わりを考察するうえで貴重な発見となり、大谷口城址の報告者（大川・岩崎 1970）は貯蔵庫的な役割を想定して、「地下式土倉」と命名している。

1970年代～現在

1970年代に入ると今までの蓄積された資料を基に地下式坑の形態分類が試みられるようになる。鎌田幸男氏は東京都西多摩群瑞穂町の「地下式横穴」調査を基にして初めて形態分類（1970）を行い、氏はそこで平面形と横断面形の差異による3類に分類した。しかしながら鎌田氏の分類は地下式横穴と地下式坑が分離されておらず問題点を残していた。塙田明治氏は1975年に神奈川県逗子市池子須賀神社裏の「地下式壙」調査を基に神奈川県下における堅坑型地下式坑をA～Gの7類に形態分類（第1図）された。現在知られている形態のほぼ全てが摘出されており、堅坑型地下式坑の形態を本格的分類とした点で高く評価されよう。

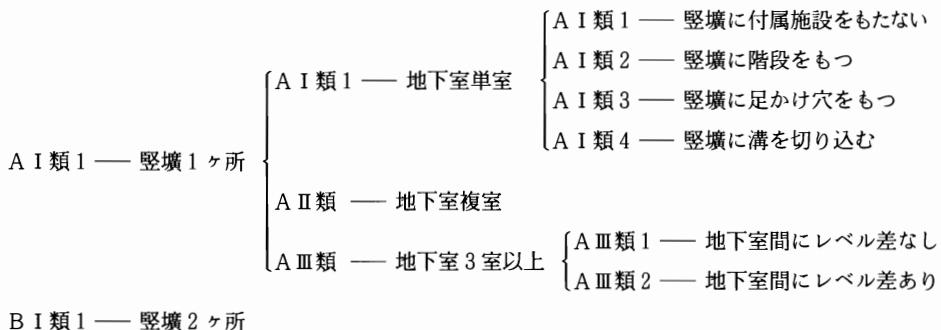
1977年には中田英氏が地下式坑研究の集大成とも言うべき「地下式壙研究の現状について」を発表している。氏は数多くの資料を駆使し、研究史、立地、形態分類、構築年代、機能等を考察し、現時点においても地下式坑研究において指針となる論文である。氏はこの論文の中で地下式坑の基本的定義を『「地平面下に堅壙を掘り下げてこれを入口部とし、その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」と規定する』として定義さ



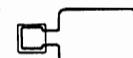
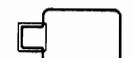
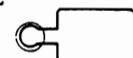
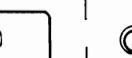
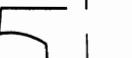
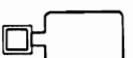
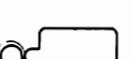
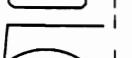
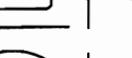
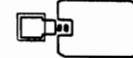
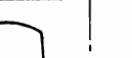
第1図 塚田明治分類 (1975)

れた。「細かく形態分類したことにより形態的に多彩であるという事実以外のものは何も引き出し得ていないのである。むしろ、巨視的な観点で分類する必要がある」として入口部を豊坑によって構成される地下式坑の形態を4類8種に分類し、機能としては貯蔵庫説の立場を取るとともに、墳墓説に疑問を投げかけている。この段階では階段付き地下式坑は検出例が無かったことであろうが、形態分類には含まれておらず、あくまでも豊坑型地下式坑の分類となっている。

中田英分類 (1977)



1979年には半田豊三氏の「本邦地下式豊の類型学的研究—特に関東地方を中心として」と題する論文が発表された。半田氏は「地下式豊というものは、中世初頭に発生し一定の機能をもって展開し、中世末にその終末を迎える遺構と考えること」という概念のもとに論考を展開し、ここで初めて豊坑のみではなく斜坑に階段を有する地下式坑を分類に取り込み、形態を4類29種に分類（第2図）した。先の中田氏による地下式坑形態分類定義を拡大したことになる。ただし、この場合、中田分類との連続性・連関性について考慮されているかどうかを問題点としておかねばならない。

	A	B	C	D	E
無段	1  	1  	1  	1  	1  
	2  	2  	2  	2  	2  
有段I類	1  	1  	1  	1  	1  
	2  	2  	2  	2  	2  
有段II類	 	 	 	 	 
有段III類	   	   	   	   	   

第2図 半田堅三分類 (1979)

半田分類について多少触れると、半田氏は大きく無段と有段に分類したが、無断～有段Ⅱ類までは形態的には中田分類のA類に全て含まれるもので、唯一、階段付き（有段Ⅲ類）のものが、中田分類に加えられたと見ることもできる。中田分類の発表から僅か2年後の論文であるにも係わらず、29種類におよぶ形態分類を行った点は、半田氏が指摘する巨視的観点をどのように受けとめられていたのかが問題になるであろう。

次に半田氏は地下式坑の機能を、分布、立地条件、出土遺物、他の遺構との関連等から中世墳墓として中田説と真っ向から対立する見解を示し、「江戸時代のものなどは地下倉とでも呼んではっきり区別することが大事である。」とするとともに、地下式坑の機能を論ずる場合、特に周辺の遺構との関連性について注意を促している。さらに1994年には半田氏は「地下式墳再考—市原市台遺跡中世遺構の分析」の中で氏の墳墓説を一步進めると同時に、地下式坑の群構成についてとりあげられ、群の類型化を試みる中から、個々の形態のみならず中世遺構と地下式坑との関連性を有機的に捉える研究方法を提示し、今後の地下式坑研究の一つの方向性を指示した点においては評価されねばならない。

その中で本稿で論じられる階段付き地下式坑については比較的近年（80年代以降）になってから検出されはじめたものであるためか、特に議論の対象とはなっていない。

II 階段付き地下式坑の様相

I章では、研究史を概略してみたが、現在数多くの地下式坑の発見例が増加し、報告書が刊行される中、形態論・群構成の抽出・類型化など地下式坑の研究方法はかなりの進展をみている。その中で類例は少ないものの現実に斜行階段付きの地下施設が検出され、類例も今後増加していくであろうことを鑑みると、地下式坑研究の進展に伴いこれらの遺構の取扱が今後問題となることは必然であろう。

また、地下式坑の機能が貯蔵庫説・墳墓説の対立をみたままで確定するに至っていない現在において、規模・形態が異なれば、たとえば同じ貯蔵用施設といっても、機能が異なる可能性がある。しかし、その機能を先に決定することが未確定の状態においては、やはり形態差を基本としなければならないであろうし、その場合の形態差はどの程度の基準において分類・分離されるかが問題となり、再び中田氏の言われる巨視的観点の指摘に繋がるところでもある。すでに半田分類において階段付き地下式坑が地下式坑の分類範囲に加えられ、横方向に地下室を設けることに主目的があるとすれば、本稿で用いる「階段付き地下式坑」も大きくは地下式坑概念に加えられるものであろうと考えたい。但し、斜行階段となる入口部の日常性（開閉性）が機能問題と強く係わる可能性を考慮したうえで、ひとまず「階段付き地下式坑」として地下式坑分類の中での独立性を示しておきたい。

1. 階段付き地下式坑の形態と類例

神奈川県厚木市七沢神出例

七沢神出遺跡（第3図）では2基の斜行階段付地下式坑が検出されている。本遺跡は七沢城址内の中心部に近い郭に位置し、調査前から肉眼で人工的な平場が観察した地形である。調査の結果、14世紀後半～15世紀代の中世遺構が多数検出され、地下式坑もまた、それらの遺構と重複して発見されている。報告書の中で筆者は地下式坑が構築されていた時期を第1期として本遺跡上においては最も古い遺構であると認定した。また、これらと同時併存関係にある遺構は確認されておらず、地下式坑のみが存在した時期である。第2期には地下式坑内の土層観察等から掘立柱建物址の構築に伴い2基の地下式坑は埋め立てられたものと推定され、地下式坑が機能していた期間は短いものであったろうと思われる。

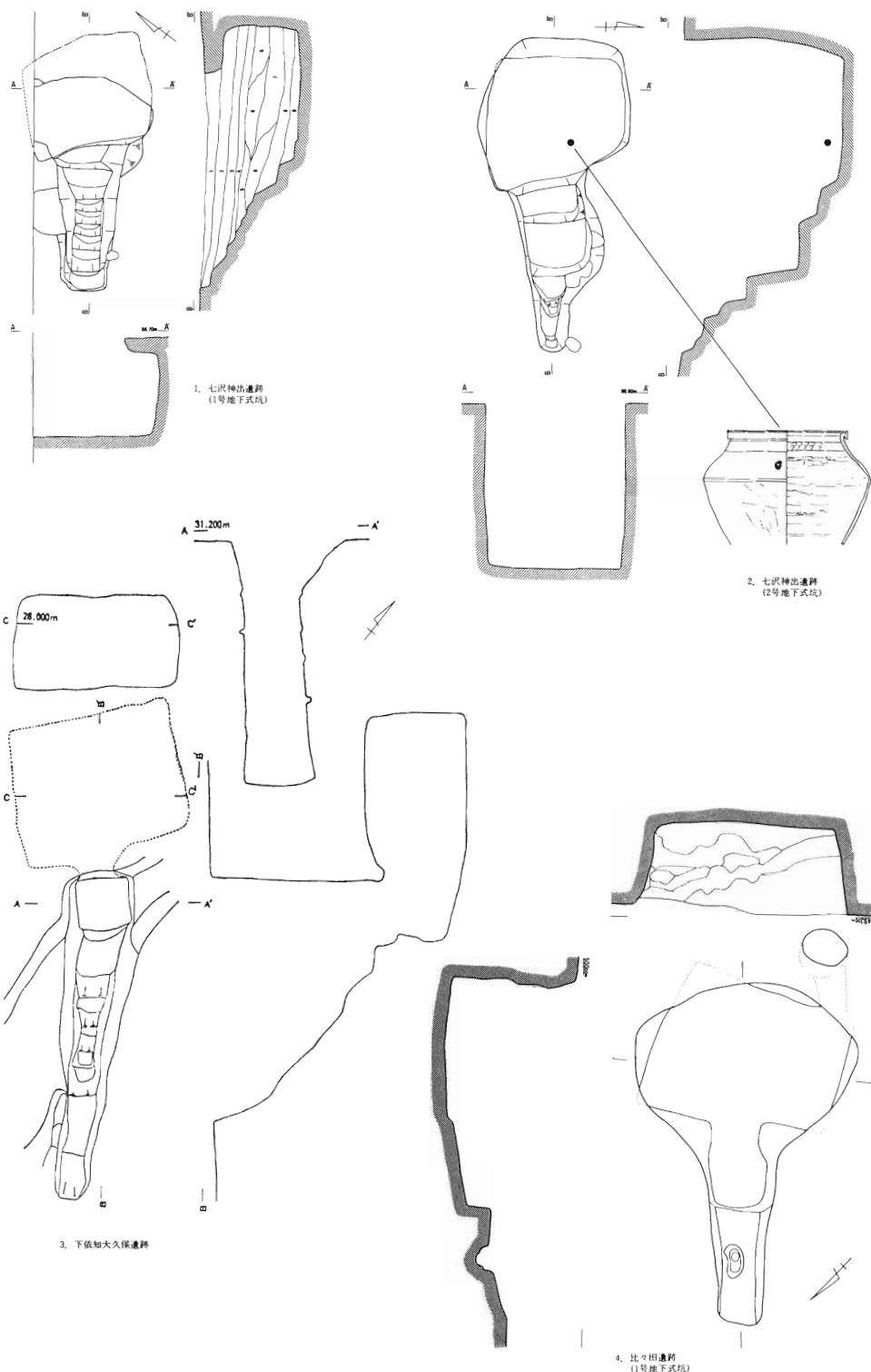
1号地下式坑（第3図-1）の開口部は北東を向き地下室も同じ主軸方位をとり、地下室に通じる入口部には地表面から数えて8段の階段が構築されており、幅も平均して約80cmと出入りには十分な幅を取っている。地下室の平面プランは不整方形を呈し、床面積は4.2m²を測り、工具痕跡は観察されなかった。

2号地下式坑（第3図-2）の開口部はほぼ真東を向いており、地下室の主軸方位と同様である。地下室に向かう入口部には6段の階段が構築されているが、4段目と5段目との落差（90cm）が大きいことと、1号地下式坑と比較して入口の傾斜角が大きいことが特長的である。出入り口の幅は1～2段目にかけてはやや狭いもののそれ以下では1m近くも幅をとっており、1号同様に出入りに際しては何ら不便さは感じず、恒常的な出入口としての使用には十分耐えうるものである。また、地下室は不整方形を呈し、床面積は5.3m²を測る。これら地下式坑の特長として複数の階段を有するために入口部の平面形態が長大になることが挙げられる。

次の問題は1号と2号地下式坑が同時併存関係にあったものか、あるいは時期差があるかということであるが、1・2号地下式坑の位置関係は互いに一定の距離をあけて互いの存在を意識しているように構築されていることと、形態が類似していることから同時期に比定されても良いと考える。なお、本址からは常滑甕（14世紀後半）の大破片が出土しており、遺構の廃絶の仕方やその後の掘立柱建物址との時期からみて14世紀後半～15世紀初頭にかけて構築されたものとみて差し支えないであろう。七沢神出例は現在までのところ階段付き地下式坑としては最も古く、かつ形態的に完成された例として今後の一つの基準となり得るものである。

千葉県山武郡市田向城跡例

最近の報告の中で同じ中世城郭内からの出土例として田向城跡（1994）IV郭で検出された2基の地下式坑（第4図）が共通した立地条件・形態を示している。001号地下式坑

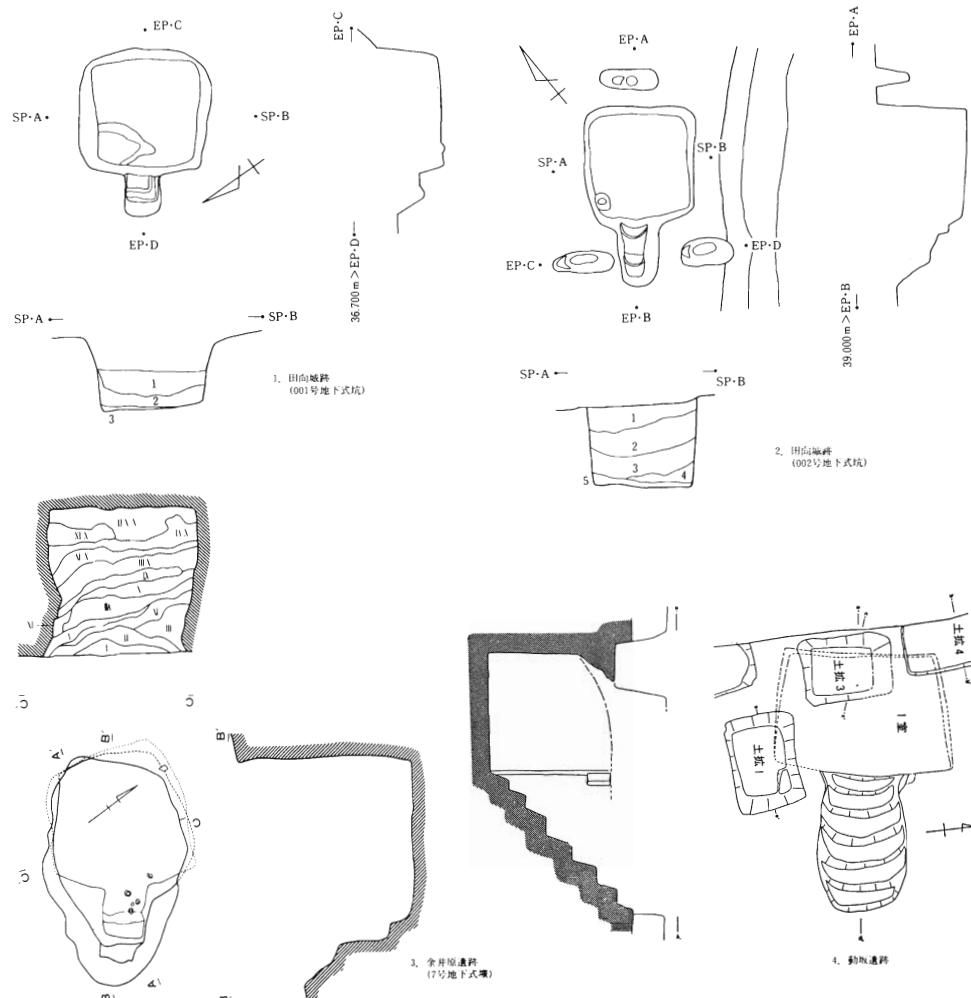


第3図 階段付き地下式坑の類例 (1)

(第4図-1) は周溝を有する階段を1段、002号(第4図-2)は2段の階段を入口部に持ち堅坑部分は検出されておらず、地表面に3基のピットを伴っており、おののの地下室の床面積は001号が2.8m²、002号が2.4m²と七沢神出、下依知大久保例と比較すると地下室の平面積が半分以下となる小型の地下式坑である。時期は古くとも16世紀中葉に比定されており、現段階で七沢神出例を最古とし田向城跡を終末期とするならば、階段付き地下式坑の存続期間は15~16世紀の約1世紀とすることができる。また、報告者は遺構の性格を地下式倉庫としている。

神奈川県厚木市下依知大久保遺跡例

下依知大久保遺跡(1987)では1基の地下式坑(第3図3)が発見されており、本類



第4図 階段付き地下式坑の類例(2)

型が検出された最初の例となろう。入口部に 6 段からなる階段を有し、そのために入口部の平面形態が長大となっているところは七沢神出例に極めて類似している。地下室の床面積も 4.6 m² を測り、規模的にも近い値を示している。ここで報告者は「一般的に地下式土壙は縦坑のみであるが、本遺跡においては堆積土層において切り合いが不明確であるため階段状の施設が地下式土壙と同時に発見されたかどうかははっきりしない。」として、遺構の重複状態をあえて考えざるを得ない状況を作り出している。従来堅坑で構成されたものが地下式坑であるとの認識に立てば、未見の階段付き地下式坑に遭遇した報告者がその解釈せざるをえなかったことも肯首できる。

神奈川県伊勢原市比々多遺跡例

比々多遺跡(1986)では 5 基の地下式坑が発見され、そのうち 1 号地下式坑(第3図-4)が本類例に極めて近い形態を示している。検出状況が良好ではないため判然としない部分は多々あるものの、入口部は堅坑ではなく斜行状になり、実測図からすると少なくとも 2 段の階段が観察される。地下室は方形を呈し、床面積は約 6 m² を測る。大型の地下式坑である。

東京都町田市金井原遺跡例

町田市金井原遺跡 - 金井山弘福寺址 - (1990) では 9 基の地下式坑が発見され、そのうち 7 号地下式坑(第4図-3)は入口部に地表面から 2 段の階段を有しており、地下室の面積は約 4 m² を測る。金井原遺跡例は「群」の類型としては(4)類 C 種に分類され、報告者は遺構の性格を出土遺物等から墳墓と推定している。また、本例は形態的には七沢神出例と比較し、階段部分での斜行化があまり顕著ではないため A I 類 2 (中田分類) に取り込まれる可能性もある。

東京都文京区動坂遺跡例

ここでは地下式坑ではないが類似した遺構例として動坂(1978)の地下室(第4図-4)を挙げておく。動坂では江戸期に比定される 4 基の地下室が発見されている。そのうち最も遺存状況の良好な 1 号地下室は入口部に 6 段の階段を有し、地下室に至っている。地下室の形状は長方形を呈し、床面積約 6 m² を測る。機能は貯蔵施設が想定されており、階段付き地下式坑の機能を探るうえで参考資料となろう。ただし、本例が地下式坑の発展形態の一つとして系統的に繋がりを持つものかどうかは現状では明らかにされていない。

以上、類例(5 遺跡 7 例)で述べてきた地下式坑は入口地表面から連続した階段を有し、地下室に至る点で、従来から認識・分類されている地下式坑とは異なる形態を呈しており、

研究史の章で述べた諸氏の分類A I類2（中田分類）・有段III類b種（半田文類）と比較してみると、一見、両者の中間タイプ的形態とも思われる。そこで本類型がこれらと系統的に同一線上から派生したものか、あるいは全くの別系統上に存在するものかどうかを検討してみよう。

半田氏は有段III類b種を「豎坑底が主室より深く、1段以上の段差をもって地下室に至るもの。」「豎坑がDの字形の平面形を呈し、数段の階段となりその最下段から主室へと上がる。」と規定し、古代的な様相を残すものとして土壌の壁の一部を堀り込み龕としている遺構が進化したものが有段類であるとしている。この龕の意識が「1段以上の段差をもって地下室にいたるもの。」に表出されるわけであるが、これに対し階段付地下式坑には地表面から階段が連続する点では共通するものの階段最下部から地下室への段差は認められず、ここでは龕の意識は皆無である。次に中田分類によるA I類2「階段を付設する豎墻と单室の地下室からなる地下式墻である。」との比較において本類型では、階段から地下室への繋がりは同様であるが、入口部に豎坑の意識が存在していない。

入口部には有段III類b種、最下段から地下室にかけてはA I類2に類似している点で、中間タイプ的形態と表現したが、仮に中間タイプとするならば、A I類2と有段類b種には系統・あるいは発展的な繋がりが必要となる。しかしながら、そこには系統的な繋がりは見いだせないのである。なぜならば、有段III類は豎坑に対する意識が希薄で、龕を大型化させることを目的として進化した形態であるのに対して、A I類2は豎坑で構成された地下式坑からの発展形態として、あくまでも豎坑の存在を意識し、当初からある一定の規模を持つ地下室を有する点において、両者の構築目的・発生要因は異なるからである。

よって階段付き地下式坑もこれらの分類形態とは区別して考えることが妥当であり、その形態的特長は「单室の地下室を持ち、入口部が地表面から地下室まで連続する階段で構成されるために入口部は斜道化する」とすることができる。また、本類型はさらに細分が可能であり、現状では最古の七沢神出例「入口部が長大化し、地下室も大型」の類型1と、最終末に当たる田向城跡例「入口部はあまり長大化せず、地下室の規模も小型」の類型2とする2類型に分けられる。進化論的には類型1から類型2への規模縮小化という変遷が想定されるが、類型2は田向城跡例のみであること、2つの類型には約1世紀の時間幅と地域の隔たりが存在し、中間に位置する資料が確認できないことから現段階で両者の繋がりを明確に論ずることは困難である。

2. 階段付き地下式坑の分布・立地

分布は現在の類例では南関東に限られている。特に入口部が長大化する類型1は神奈川県伊勢原市・厚木市に集中して検出され、類型2は今のところ千葉県山武郡市田向城跡例のみであることから今後は地域性についても考慮せねばならないだろう。また、類例のう

ち2遺跡4例（全体の約60%）までが城郭内からの検出であり、その立地条件に特異なあり方を示している。

3. 階段付き地下式坑の機能

本類型も堅坑型地下式坑と同様に出土遺物は乏しく、遺物・形態の両面から機能を類推することは極めて困難であり、形態から機能を類推するしかないのが現状である。しかしながら、堅坑型地下式坑と比較して階段付き地下式坑が極めて特長的な入口部で構成されていることから、形態のみからでもその機能を類推・特定することが十分可能かと思われる。その形態的特長から推定すると、地表面から連続した階段を有するということは地下室への出入行為を容易にするための入口施設であること。それらを構築する動機として恒常的な使用目的が考えられること。現状での検出例が中世城郭内におけるものが多いこと（田向城跡の報告中では七沢神出例より地下室の床面積が半分以下であるが地下式倉庫と想定している）、地下室の専有面積が4～6m²と一定量の物品を貯蔵する空間としては十分であること。また、地下式坑ではないが、貯蔵施設としての機能がほぼ確定している遺構である動坂遺跡の地下室にも類似した形態を示しており、地下室の面積も動坂とほぼ同等の6m²を測るなど、貯蔵施設としての空間の取り方に共通性が見いだされること等から、貯蔵庫的な役割が想定される。その場合、中世城郭内からの検出が目立つため、他の地下式坑に比べて使用者に階層差を見いだすことができ、階段付き地下式坑は武士階級が使用する地下式坑と類推することもできよう。

唯一、金井原遺跡のように墳墓葬祭的な遺物を伴出している例が注目されるが、遺物の出土状況が覆土中からの出土であることから、地下式坑が廃絶された後に投棄された可能性も考えられる。さらにこのような墳墓葬祭的遺物を伴うことが常態であるならば、唯一例ということは疑問視されねばならないだろう。従って、これをもって墳墓とする積極的な要因にはなりえない。

III まとめ

以上、階段付き地下式坑についての形態・機能を検討してきたが、改めてここで4項目に整理してみることとする。

① まず、階段付き地下式坑は従来の堅坑型地下式坑とは入口部の形態差によって地下式坑分類の中に独立した位置を占めるものであることを明らかにしておきたい。形態的には「単室の地下室を持ち、入口部が地表面から地下室まで連続する階段によって構成されるために入口部は斜行化する」特長を持ち、さらに規模の大小によって2類型に細分される。

- ② 時期は現況では七沢神出遺跡例を最古（14世紀後半～15世紀初頭）とし、田向城跡例を最終末（16世紀中葉）とする約1世紀間であること。
- ③ 現況での分布は南関東に限られている。特に類型1は神奈川県厚木市・伊勢原市に集中しており、類型2は千葉県田向城跡例のみである。立地は半数が中世城郭内からの検出例である。
- ④ 機能は、形態的に恒常的出入を意識した入口部で構成されており、地下室の専有面積も一定量の物品を貯蔵するには十分であることから貯蔵施設としての役割を担っていたものと推定される。
- また、竪坑型地下式坑の各類型が中世期全般を通じて存在し、立地条件においても多様化を示す中で、本類型の消長期間が戦国期を時代的背景とし、立地においても中世城郭内からの検出が多数であることも、階段付き地下式坑の出現・消滅を探る上で無視できない要因であろう。今後は階段付き地下式坑の資料増加を期待してさらに考察を深めて行きたい。なお、末筆ではあるが本稿を執筆するにあたって御助力・御助言頂いた戸田哲也先生に感謝する次第である。

（注）

本文中で使用している地下式坑の「坑」については、学史を尊重するならば「壙」を使用すべきところであろうが、「壙」には墓穴という意味が加味されているために、遺構の機能が確定していない段階では「坑」を使用することが適切と思われる。また、本文中に引用されている参考文献の用語に関しては忠実に原書の用語を使用している。

参考文献

- 安孫子昭二他 1979 「小山田遺跡群Ⅰ」
- 安孫子昭二他 1983 「小山田遺跡群Ⅱ」
- 新井 真博他 1984 「多摩ニュータウンNo.278 遺跡」
- 石川日出志他 1990 「大門遺跡」
- 伊藤 玄三他 1986 「法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ－A地区－」
- 伊藤 敏行他 1986 「多摩ニュータウンNo.460 遺跡」
- 伊藤 正義他 1983 「受地だいやま遺跡発掘調査概報Ⅱ」
- 今井 恵昭他 1986 「多摩ニュータウンNo.352・253 遺跡」
- 岩崎 陽一他 1984 「多摩ニュータウンNo.396 遺跡」
- 碓井 三子他 1990 「金井原井遺跡群Ⅲ」
- 梅原 未治 1915 「越前敦賀郡の遺跡遺物」『考古学雑誌』5－8
- 江藤 昭 1987 「下依知大久保遺跡」
- 奥田 直栄 1967 「青梅市今井に於ける中世城郭の調査」
- 梶原 勝他 1987 「宇津木台遺跡群Ⅸ」

- 川島 雅人他 1982 「多摩ニュータウンNo.457 遺跡」
- 川島 雅人他 1987 「多摩ニュータウンNo.271・452 遺跡」
- 栗城 讓一他 1981 「多摩ニュータウンNo.519 遺跡」
- 甲崎 光彦他 1987 「多摩ニュータウンNo.125 遺跡」
- 小林 博範他 1987 「多摩ニュータウンNo.451 A・452 遺跡」
- 小林 深志他 1984 「多摩ニュータウンNo.407 遺跡」
- 小山 裕之 1994 「七沢神出遺跡」
- 斎藤 進他 1988 「多摩ニュータウンNo.692 遺跡」
- 境 雅仁他 1993 「及川柳流遺跡・及川宮ノ下遺跡」
- 榎原 松司 1981 「下宿内山遺跡発掘調査概報5」
- 滝澤 亮他 1986 「比々多遺跡群」
- 滝澤 亮 1989 「殿村遺跡」
- 武田 均他 1984 「多摩ニュータウンNo.358 遺跡」
- 武田 均他 1986 「多摩ニュータウンNo.799 遺跡」
- 千葉 裕道他 1984 「多摩ニュータウンNo.751 遺跡」
- 塙田 明治 1975 「逗子市池子須賀神社裏地下式壙と類例遺構について」『横須賀考古学会年報18』
- 中田 英 1977 「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』2
- 中山平次郎 1921 「考古雑録(五)」『考古学雑誌』119
- 中野 修秀 1994 「田向城跡」
- 林田 利之 1992 「駒井野荒追遺跡」
- 半田 堅三 1976 「台遺跡B地点の調査」『上総国分寺台発掘調査概要』
- 半田 堅三 1978 「台遺跡A地点の調査」『上総国分寺台調査概報』
- 半田 堅三 1979 「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』2
- 半田 堅三 1993 「地下式壙再考」『市原市文化財センター研究紀要』
- 持田 友宏 1969 「神明上発見の地下式横穴古墳調査報告」『日野の歴史と文化』2
- 山口 慶一他 1991 「多摩ニュータウンNo.450 遺跡」
- 山村 貴輝他 1990 「四葉地区遺跡」
- 雪田 孝 1976 「東京都府中市新発見の地下式横穴」『考古学ジャーナル』121
- 及川 良彦他 1992 「多摩ニュータウンNo.496 遺跡」